

## 平成30年度第1回長野県総合教育会議

日 時：平成30年6月14日(木)

13時30分～15時00分

場 所：県庁 議会増築棟3階  
第1特別会議室

### 1 開 会

(小岩企画振興部長)

それでは、これより平成30年度の第1回目となります、長野県総合教育会議を開会いたします。本日の進行を務めます、県企画振興部長の小岩でございます。よろしくお願いいたします。

それでは最初に、阿部知事からあいさつをお願いいたします。

### 2 あいさつ

(阿部知事)

本年度、第1回の総合教育会議ということで、本日は、県立大学から金田一真澄学長、そして信州大学から武田三男理事・副学長にご出席いただきまして、大変ありがとうございます。

新しい年度の第1回ということですが、この4月から新しい県の総合計画「しあわせ信州創造プラン2.0」がスタートいたしました。「学びと自治の力で拓く新時代」ということが今回の計画の一番大きなテーマだと、いろいろなところで申し上げてきています。

ぜひ、この総合教育会議の場においても、教育委員会としての問題意識や視点であったり、こうした私どもの学びについての問題意識をぜひいろいろお伝えし、そして共有し、一緒になってこの学びの県づくりの方向付けをする場として、この総合教育会議を生かしていきたいと思っておりますので、各教育委員の皆様方には、引き続きご協力いただきますようお願いをしたいと思います。

そういう中で本日のテーマは「高等教育機関と連携した創造的な学びの創出について」ということであります。

学びの県づくり、さまざまな学びがあるわけでありましてけれども、私は、やはり大学、高等教育機関における「知の拠点」としての役割を、長野県内においてフルに発揮していただきたいと強く思っています。これは高校、中学、小学校、幼稚園や保育園など、子供たちの学びに対してもぜひ良い影響を与えていただきたいと思っておりますし、また私たち大人の学びであったり、あるいは今、あらゆる産業分野が人手不足、人材不足という形

になっておりますので、この産業人材の育成の面であったり、大学に対する期待は非常に大きなものがあると思っております。

今日は両先生にもご同席をいただいておりますので、ぜひ高等教育機関が持つ多様な知、多様な資源を、長野県のこの学びの県づくりにどう活かしていくことができるかという観点で、一緒になって方向付けをしていくことができればありがたいなと思っております。

率直な意見交換をさせていただく中で、この新しくスタートした総合計画が、一層、長野県の未来にとって有効なものとなるように議論していきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

(小岩企画振興部長)

続きまして、原山教育長からお願いいたします。

(原山教育長)

それでは教育委員会からも一言、ごあいさつを申し上げます。

本年度もこの総合教育会議を通じまして、知事部局と教育委員会が共通の問題意識を持ちながら、子供たちのため、そして長野県教育のために知事部局と一層連携、協力し、施策を推進していきたいと思っております。

改正民法が成立しまして、2022年から成人年齢が18歳になるというニュースが報じられております。我々の世代が持つ成人になるというイメージは、もうカチンとでき上がった大人社会に入っていくというイメージなのですが、世の中の変化のスピードがどんどん加速している中で、我々の世代が生き抜いてきた環境と、これからの世代が生き抜いて行く環境というのは全然違うのだろうなと思っております。親世代の成功体験を押しつけることは、参考になるどころか、むしろリスクになるかもしれない、そんな時代を迎えていると思っております。

彼ら若い世代こそが、新たな社会を創造する具体的な基点となっていく時代を迎えているのではないかと考えておりますので、高等教育機関と連携しながら、ぜひそういう若者を育てていきたいと思っております。

本日は高等教育機関と学校教育が連携することによって実現できる、そういう子供たちの創造的な学びにつきましても、忌憚のないご意見をお伺いしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 3 報告事項

本県の教育大綱について

(小岩企画振興部長)

それでは、ここから進めさせていただきますが、まず会議事項に入ります前に、報告事

項を1件いたします。

前回、これは1月になりますが、総合教育会議で本県の教育大綱に位置づけることとされました第3次教育振興基本計画、お手元に概要版をお配りしておりますが、この第3次教育振興基本計画につきまして、平成30年3月23日、県の部局長会議を経まして決定をいたしましたのでご報告を申し上げます。今後、これをもとに本県教育の課題や目指す姿を知事と教育委員会とが共有しながら、より効果的に教育行政を推進していけるよう連携してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いをいたします。

また、今、お手元に、先ほど知事のあいさつにもありました「しあわせ信州創造プラン2.0」、新5か年計画ですけれども、そのプラン2.0の概要版をお配りさせていただきましたので、またご覧いただきながら本日の議論に活用していただければと思います。よろしくお願いをいたします。

#### 4 会議事項

高等教育機関と連携した創造的な学びの創出について

第1部 特色ある高等教育の取組事例「長野県立大学」について

(小岩企画振興部長)

それでは、会議事項に入ります。本会議は2部構成とさせていただきます。

まず第1部としまして、長野県立大学の金田一真澄学長から、特色ある高等教育の取組事例といたしまして、長野県立大学の取組についてお話をいただきます。

その後、第2部としまして、高等教育機関と連携した創造的な学びについて、意見交換という形で進めさせていただきます。

それでは第1部でございます。お手元には資料1をご用意いただければと思います。

それでは金田一学長、ここからご説明をよろしくお願いをいたします。

(金田一長野県立大学学長)

今日は長野県の総合教育会議にお呼びいただきまして、本当にありがとうございます。うちの大学、長野県立大学の宣伝ができると思って喜んで今日はやってまいりました。

といっても、今日は2つテーマをいただいております。長野県立大学の学びの特長というのと、それから今の長野県の幼児教育、小中高校生の学びについて、それらについて望むことというこの2つのテーマをいただきました。これについて15分でお話をさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いをいたします。

向こう(スクリーン)を見るのが大変であれば、配付資料もございますので、そちらをご覧くださいいただければと思います。

1つ目が長野県立大学の学びの特長、2つ目が県内の小中高生の学びに望むことという

ことでございます。ここでは「学び」という共通のキーワードを取り上げまして、2つのテーマについてお話したいと思います。

まず、1つ目のテーマ、「長野県立大学の学びの特長について」は、4つ挙げたいと思います。1番目が、教員と学生との距離が近い学びということで、これはさんざん言ってきましたけれども、首都圏のマンモス大学と比べまして、うちのこの小規模大学がまず一番最初に目指さなければいけないのは、この質の高い親身な教育ということでございます。そういう意味で、この1番目が大変重要だと考えます。

続いて2番目です。2番目はグローバル時代に相応しい学びということで、これも今、社会、日本の社会において一番大事なグローバルな時代においてどういう学びをするかということで、これも非常に重要だと考えております。

続いて3番目は、リーダーとしての人間性を磨く学び。これリーダーというのはかなり欲張った言い方ですけども、やはりこれからグループなり、その大きな企業のリーダーとして活躍できるような人をまず求めたいという夢が、この大学にはございます。そしてその場合に、人間性が大変大事だということになります。

続いて4番目、これは不確実な時代を生き抜く主体的な学び、「主体性」ですか、これはおそらく非常に重要なキーワードになるだろうと思います。この4つについてまずお話しいたします。

まず1番目についてですけども、教員と学生との距離が近い学びということ、これについては、発信力ゼミ、16人で通年で必修で行っている入門ゼミでございます。それから英語の集中授業については25名でレベル別に、週4回行っております。これが少人数クラスということになるかと思えます。

また、うちの大学は2期制ではなく4学期制です。4学期制の特徴としては週2回授業がございます。つまり2カ月で終わらせるということで、週2回になります。そのために学生の顔と名前を教員が覚えるということで、お互いに非常に親密な関係になるだろうということがあります。

それから、早期から専門ゼミが始まります。専門ゼミは、普通は3年以降ですけども、うちは2年次から専門のゼミが始まります。これも、専門の先生と学生とが非常に距離が近い学びになるだろうと思います。

これは余計なことですけども、新入生全員と個別学長面談をやりました。やはり学長と学生が最初に対面して個別に話をすることは、学生にとっても非常に刺激的なのではないかと思えます。一例として写真を挙げさせていただきました。

続いて2番目にまいります。2番目は、グローバル時代に相応しい学びです。これについては、4つ挙げております。

1年次からの英語のレベル別の集中授業、ネイティブによる英語のみの授業を含め週4回、本学にはネイティブが4人いらっしゃいます。そしてまたバイリンガルの方もいらっしゃいます。それが週4回、英語だけでやる授業がございます。

それから1、2年次に3回のTOEICの外部評価をやります。これは、学生が自分の今の英語のレベルがどのぐらいかということを目覚めさせるために大変良いということと、また、本学がどうやって学生たちの英語力を高めていっているかということを目観的に示すデータにもなります。就職するときにも有利だろうというふうにも考えました。

そして、2年次における全員参加の海外研修、これは一番の売りでもございますけれども、世界中6か国に全員が参加するという短期の海外研修です。短期ではありますけれどもそれなりに意味のあるように、前後に研修期間を設けております。

また、海外からの留学生との交流、これはまだスタートできておりませんが、これからスタートするところがございます。以上、4項目がございます。

この写真は、英語のみの授業で、100分、英語だけで授業をやっております。学生たちは大変なんですけれども、毎回、最後には課題が出ます。課題はちゃんと聞き取れないと、寮に帰ってから他の友だちから聞いているという話ですけれども、かなり厳しい授業をやっております。以上が2番目の項目になります。

3番目はリーダーとしての人間性を磨く学びについて、本学がやっていることを述べさせていただきます。

これについては3つございます。まず、本学には象山寮という寮がございます。これが1年次全寮制となっております。ここで全人教育をしようということなんです。まだ1年しかいませんけれども、2年次以降の一部の学生との共同生活をしようということなんです。これからの大学は学力を高めるだけではなくて、人間性をちゃんと育てる、人間を育てることが大変重要だということがございます。

寮は単に寝泊りする場所ではなく、そこで例えば「象山未来塾」のようなことをやります。これはどういうことかということ、学生が主体的に長野県の各界の著名人、または活躍している方々をお呼びして、学生が主体となってそのゲストと一緒に車座になって語り合うような、授業というよりも、そういうゼミをやっております。

それから、うちにはソーシャル・イノベーション創出センターがございます。CSIといいますが、そこでは地域の振興、また起業家を目指す方を支援するというようなことをやってございますけれども、そういうところがこの地域活動やボランティア活動に積極的に動いているということがございます。

こういったことをやることによって地域とかかわることで長野が好きになり、就職先として長野を選択するというようなことも起こるのではないかとということで、この3番目、リーダーとして人間性を磨く学びということを目指しております。

この写真は「象山未来塾」の様子です。これは寮ですけれども、写真の奥にいるのが理事長です。学生が主体となって理事長が出したテーマについて議論しているという、そういう風景でございます。

続きまして4番目、不確実な時代を生き抜く主体的な学びというところを取り上げます。

これ結構、主体的な学びというのは大変難しく、主体性を育てるということは大変重

要ではあるけれども、非常に難しい面があります。

ポイントとして2つ挙げました。1つは、創造的・探求的・実践的な学びということで、C S Iとの連携による起業に関連する学びです。これは、学生を社会に出して社会において学ぶという形で行います。大変刺激的な授業になると思います。発信力ゼミは、どちらかというとアクティブラーニングによって、先生方がそれぞれ自分の世界について学生と問題提起したり、問題を発見、解決するような学びになっております。

もう1つは、持続的・内発的な学びというのが大事だと思います。これはこれからの人生100年時代を迎えて、やはり大学を出てからの学びも大事だということを含めて、ここでは専門領域の醍醐味を早期に味わう学び、これは、言っている意味がわかりにくいかと思えますけれども、つまり学ぶことが楽しいんだという、そういうことを教えたいという学びでございます。また、ディスカッションを含む学生参加型の学びというのは、一方通行ではなく、先生と学生が双方向でディスカッションすることによって学生が主体的に学んで、授業に入っていくという、そういう実感を持たせるような授業をしたいということでございます。これが4番目の不確実な時代を生き抜く主体的な学びということでございます。

この写真は、発信力ゼミの様子です。先ほど、アクティブラーニングをやっているということを行いましたけれども、これは先生方がそれぞれ自分の魅力を出しながら、学生にさまざまなテーマを与えて、まずプレゼンテーションができなければいけないというところからスタートして、その他の能力をも育てるといふ、そういう授業でございます。通年、必修でやっておりますので、他大学よりも分量は多く充実しているだろうと考えております。

以上、本学の学びの観点から見た教育について、お話し申し上げました。

次に、2つ目のテーマとして、「県内の小中高生の学びに望むこと」ということで、こちらのほうは大変難しいテーマをいただいたのですが、これについても5つほど挙げさせていただきたいと思えます。

1番目は日本語力+論理的思考力・表現力・判断力というところですが、これはちょっと意外に思われたかもしれませんが、大変重要です。とりあえず、先に5つ挙げます。2番目は主体的・積極性、そして意欲を引き出す学び、これも大変重要だと思います。3番目は、豊かな感受性、他者への思いやり、郷土愛、4番目は健康、そして5番目は英語力ということで、1番目から順に説明をしていきたいと思えます。

日本語力+論理的思考力・表現力・判断力ということなのですが、これについては、今の入試の状況でございます。センター試験から共通テストへの移行がこの2年後にございます。そうしますと、そこでは思考力、表現力、判断力を求めますので、数学の入試などで文章題の試験が大変多く出ているという状況でございます。まずそのことに対して日本語力をきちんと持つということが大事だということ。

それから、推薦選抜入試が大変増えております。そうしますと、小論文や面接の機会も

大変増えております。早稲田や慶応では4割がこういう形になりました。今まではペーパーによるものが多かったのですけれども、これからは小論文、面接の時代に入ってくると思います。これについても、やはり日本語力が大変重要だということでございます。

それから、これが本当は一番大事ですけれども、大学での学問、探求が教養の基礎力として日本語力が大変重要だということです。こういったことが非常に欠けているということがむしろ問題だと思います。

それに対する方策としては、1つはプレゼンやレトリックの早期導入が大事だと思います。小学校で、海外では割とやるんですけれども、日本ではあまりこういう教育をしていません。つまり、ちゃんと自分の意見を言えるという教育ではなく、日本では小学校の国語の時間は、どちらかという文章を読んで主人公はその時どういうふうに思ったかとか、そういった付度の授業が多いんですけれども、やはり自分の意見をきちんとわかりやすく、しかも説得力を持って言えるというような教育も、これからはしていかなければいけないだろうと思います。

また、ディスカッションを全授業に導入すること。やはり先生が一方向的にしゃべるのではなくて、双方向でやっていく授業、学生が、生徒が参加するような授業をこれからはやっていかなければいけないと、これも小学校に限らず、中学、高校もそうだと思います。

それから、読書習慣を身につけること。これも今、小学校、中学校はよくやっているほうだと思いますけれども、高校で週に1時間、読書をしないという生徒が5割いるそうですけれども、これは大変もったいない話です。読書習慣、これはあらゆることに通じますので、ぜひこれをやっていただきたいというのがこちらからの希望でございます。

続いてのスライドは、おまけです。これは新井紀子さんという方、AIの専門家ですけれども、今の子供たちは教科書がちゃんと読めていないのではないかということを言っています。その例として一つ、大学生の正解率が64.5%の問題をそこに挙げてみました。今、ちょっと時間がなくて、とてもこれやっている暇がありませんけれども、言っていることは大変単純なことを言っているに過ぎないのですが、実はこれが大学生に解けないということがあります。

これは日本語力の問題だけではなくて、論理的思考力が問われているということもありますけれども、論理的思考力の基盤には日本語力が必要ですので、ぜひ母語力を鍛えていただきたいということで引用させていただきました。

2番目は主体性・積極性、それから意欲を引き出す学びということになります。これについては2つ挙げてみました。不確実な時代を生き抜く必須の資質ということですね。この主体性というものが資質なのか、それとも努力でこう高められるのかということは議論があるところだと思いますけれども、私としては、ある程度努力で高められるのではないかと、また意欲もそうだろうと思っておりますので、ぜひそのあたりをご理解いただきたいと思います。

それと、人生100年時代における持続的な学びの必要性、つまり大学で最新の知識を学ん

でも10年経つと古くなってしまいます。では、どうやって持続的にやっていくかという、その持続的な学びが大変重要なポイントになると思っております。

これらの資質をつけるためにこちらが提案します手法としては、まずディスカッションを全授業に導入する。これは先ほども言いました。ディスカッションをやることによって授業に参加し、おもしろければどんどんそこに生徒たちがのめり込んでいくような、そういうことをやってほしいと思います。

また、学ぶことの楽しさを感じさせる授業、教育をしてほしいということがあります。

そして、自己肯定感を持たせる、ほめる授業をしてほしい。日本はほかの国に比べて自己肯定感が低いと言われております。やはり自信を持たせるような教育をすべきだと思います。

それから、持続的学び、これ先ほど出ましたけれども、人生100年時代になったときにやはり読書というのは大変重要であり、多分、長野県の特徴としても読書はいいんじゃないかなと思ったので、あえて二度、書かせていただきました。

(写真を示して) ここでディスカッションの形式の授業をしております。机と椅子を自由に並べられるようにうちの大学はできております。ディスカッションすることによって自分の考えをより深めること、そして相手の意見を聞くこと、そしてその中から主体性を出していくというような教育が大事ではないかということです。

続いて3番目ですね。豊かな感受性、他者への思いやり、郷土愛。郷土愛はちょっと後から付け足したという部分がございます。これも大変大事です。これも2つ書きました。

リーダーとして必要な資質として、リーダーシップをとることは大変重要なんですけども、それ以上に他者への思いやりとか、コミュニケーションが重要だと思っております。

それから、AIに代替できない人間だけの資質として、この豊かな感受性があると思います。今、AIが仕事を全部奪ってしまうのではないかとされていますけれども、やはりそれに代替できない、人間だけの資質としてこの豊かな感受性、他者への思いやり、郷土愛というのは大変重要なポイントになると思っております。

小さなうちから愛情を持った親身な教育ということ、それからコミュニケーション能力の育成。コミュニケーション能力をここで書いたのは、他者への思いやりを持っていても、ちゃんと呼びかけないとだめなんですね。黙ってはいけなないと、ちゃんと呼びかけて「どうしたの大丈夫かい」と言ってあげるようなコミュニケーションが大事だということ。それから地域のボランティアの導入、こういったことを進めていけばいいのではないかと、手法のひとつとして書かせていただきました。

この写真は、5月に行われた善光寺の花回廊というイベントにうちの学生が参加しているシーンでございます。

4番目は健康ですね。これはもうよくわかることだと思いますが、あえて説明はあまりしませんけれども、不確実な時代を生き抜くために、人生100年時代を幸せに生きるためにも健康は大事であり、やっぱり小学校からこうサークルとか部活をきちんと行う。特にス



ポーツは大事だと萩原委員も言っていると思いますので、ぜひここで挙げたいと思いました。

それから栄養のバランスのとれた三度の食事、それから質の良い睡眠ですね。これは当たり前のことなのですが、若いうちはこれをやらないのが若者の特権みたいになっておりますけれども、これは大変重要だということです。

象山寮では男の子も料理をつくります。この写真は夕食をつくっているところです。朝食、そしてお昼のお弁当も、男の子も女の子もやっております。これは、自立するという意味でとても素晴らしいことだと思うのですが、ただ、食堂側は赤字経営でしていますので、その辺がちょっと心配といえば心配です。とにかく、大変素晴らしいことだと思っております。

最後、5番目は英語力ですね。これも当たり前のことで、グローバル時代の地域社会で活躍するために、そして、これはいろいろな勉強法があるので、これ私のことを書いただけで特に強く言うつもりはないんですけれども、英語の基本文型と、あと語彙をやったほうがいいんじゃないかと思っております。

ここで、長野における世界レベルの強みの特色の認識と書きました。これは何かといいますと、グローバル時代というのは、グローバルスタンダードということが言われ、英語が共通語である。そしてそのグローバルな時代になると、何か普遍性みたいなものを求められるような時代が変わっていくのではないかと思われるんですけれども、一方で、実はその地域の特色というのは重要で、その地域の特色、個性を出しながら一方でそのグローバルスタンダードとぶつかっていくというような世界になるのではないか。そうなったときに、若者が、長野がどういう強みを持っているのかということを知覚する。そういう教育をちゃんとしておく必要があるのではないかと思ったので、あえて最後に書かせていただきました。

これは、食堂でグローバルランゲージテーブルというのをやっている写真です。以上、15分で短かったのですが、こういうようなさまざまな企画をしておりますので、もし何かご質問があったら、後でよろしくお願いたします。私のほうからは以上でございます。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。午後になりまして、気温も上がってまいりましたので、適宜、上着は脱いでいただき、進めていただければと思います。

ただいま金田一学長からご説明をいただきましたお話に関連しまして、ご意見、またはご質問がある方からご発言いただければと思います。いかがでございましょうか。では耳塚委員から。

(耳塚委員)

ご説明、どうもありがとうございました。近年の大学に見られる先端的な取組をより一層徹底させた形で採用しておられて、うらやましいなと感じたところでございます。

ちょっと話が広がってしまうかもしれませんが、県立大学への、私が特に期待する部分ということの一つ申し上げて、それともう1点は質問をいたしたいと思えます。

いろいろな期待が県立大学には寄せられていることと思えますけれども、こども学科を持っているという点で、幼児教育、教育分野での本県の質の向上を図る上で拠点として機能していただけるようになれば、これは大変にうれしいことだなと感じております。

いろいろな面があると思えます。一つは教諭、あるいは保育士の養成の拠点、それから研修の拠点、あるいは実践研究の拠点、こういう面での拠点的な機能を果たしていただければ、その成果が県内に広がっていくということが期待できるのではないかと思います。特に、単に教諭や保育士の養成機関であるというだけではなくて、おそらくは指導的な立場に立てるような養成ができるのではないかと考えております。

あと、最後に質問を1点、申し上げたいと思えます。県立大学として、今日、先生が後半でご報告いただいたことですが、先生が望まれるそのような小・中高生の学びを支援するような取組として、今後、どのようなことが可能になりそうだとお考えなのか。つまり、県内の小・中高校における学びの支援として、県立大学として取組がどんなことが可能なのかという、そういうことについての、まだ現段階では具体的なプランではないかもしれませんが、お考えがありましたらお聞かせいただければと思います。以上です。

(金田一学長)

よろしいですか。まずこども学科についてちょっと私のほうから一つ、お話があります。

こども学科は確かに、先生方は割とおとなしい先生、やさしい先生が多いんです。こども学科に来る学生たちも全員面接しましたけれども、非常に人がいいというか純真であるというか、真面目でとってもいい子ばかりなんです。

私はそれだけではいけなくて、やはりリーダーとしての資質を持たせようと思っていることと、それからフィンランドに2年次に全員が行きます。向こうで世界のトップレベルであるこども教育をちゃんと学んでくること、そして、フィンランドと長野県、そういう意味では自然保育から「森のようちえん」とかいろいろありますけれども、そういったものをきちんと体系的に、教育を体系的にというのは難しいんですけれども、幼児教育としてのメッカとなるような、そういうものを長野につくり、そしてそれを世界に発信していくような、そのくらいの夢と志を持ってほしいと、常々こども学科の先生方には言っております。

長野というところは、そういうことができる場ではあると思えますので、ぜひそういうことをやってほしいし、また、そういうことが少しずつできるのではないかと考えております。

それから2つ目の質問のほうですけれども、この支援の仕方というのはすごく難しいです。今はとにかく個別にはたくさん来るんです。さまざまな高校から、うちとこういうことをやってほしいというものがたくさんまいります。それから地域からも、うちとこういうこと、勉強会とかさまざまな講座の申し込みがございまして。これをどういうふうにしていったらいいかということがまず当面の問題としてございます。

それ以外に、長野県全体の課題がございまして。これについては、内堀先生（高校教育課高校改革推進参与）もいらっしゃいますし、原山教育長がこの教育委員会のトップをされていきますけれども、そういうところと一緒にやっていくということがすごく大事なんだろうと思います。

ただ私は、何というのかな、県というのはどうしても、長野県全体が幸せになるように、長野県全体を公平に平等に考えシステムをつくるとか、そういうことはとてもやろうとするんですけれども、こう大きいことをやろうとするときに、私は個別にこの高校に対してだったらこういう援助をして、この高校はこういう特色があるからこういう援助していいというふうに個別にやったほうがいいこともあるような気がするんです。その辺で、今ちょっと悩みがあります。

つまり実質的にやろうと思うと、個別にやったほうがはるかにうまく行くことがございます。一般的に全高校のために何かやろうというのは、これはすごく難しく、その辺、ちょっと私はまだ新米の学長でしてよくわからないので。ぜひそのあたりも含めて、逆にこちらからお聞きしたいなと思っております。

（中澤委員）

ありがとうございます。一度、県立大学を見学させていただきたいと思いましたが、ちょっと感想と、少し質問をさせていただきます。

私は幼児教育にかかわっているんですけれども、本当に夢中になって遊ぶことが幼児期の学びの基本だと思っています。本当に楽しかったとか、充実していたとか、そういう気持ち、主体性が基底にあるなと思っています。本当にその繰り返し、要するに自己実現の数だったり、自己決定の数だったりという、その中で、本当に主体性が育まれていっているなと感じているので、金田一先生がおっしゃっていたみたいに、私も主体性は高められるのではないかなと思っています。

それともう一つ、こどもは本当に学びを実感しているんだなということを感じていて、それは同時に、私たち大人もその学びを実感していくということが本当に大事なんだなということもすごく感じてきています。それで、心を動かす体験というのを、子供も大人もしていく中で、何というのか、心の筋肉みたいな感じかな、何かそんなものが育っていているんだらうなと思うし、強い、ぶれないものが育っていているんだらうなという気がしています。

幼児教育にかかわりながら、今、ある大学の幼児教育学科で授業をさせていただいてい

るんですけれども、幼児教育と同じぐらい学生を育てるといのは本当に大事な仕事だなと思っていて、今からお母さん、お父さんになる人、今から教育にかかわる人たちと共に何を学んで行くかというのが、今、本当に大事な仕事だなというのを実感しています。それが感想です。

あともう一つ、これがどのようなものか聞いたかったのが、その寮で1年次全寮制と全人教育と書かれてあって、この全人教育というのは具体的にどんな感じなのか、教えてください。

(金田一学長)

わかりました。この全人教育というのは、すみません、言い方が偉そうになりました。まず家から離れて寮で暮らすということによる自立がまず一つ、あるかと思います。長野市の近所の人でも全員が寮に入らなければいけないのですが、私は247人面接しましたが、99%が寮に来てよかったと、全寮制はすごくいいと言ってくれました。

自立の問題、それから共同生活をする中で協調性、つまりある程度、譲らなければいけない部分とそうでない部分がございます。そういう意味で協調性が生まれる。それから、これから2年生が入ってくれば先輩後輩が一緒になりますので、社会性という問題が生まれてまいります。

そしてさらにいえば、共同生活の中で大事なものは、先ほどもありましたけれども、思いやりとか人を思う気持ち、自分がここは譲ってあげようとか、やさしさとか、そういったことも学べるのではないかと考えております。

欲を言えば、その中でコミュニケーションをきちんととれるといいなと思っています。やさしい気持ちを持っていても、相手にちゃんとそれが伝わるかどうかというのがとても大事で、やはり言葉の問題というものがそこについてくるかなと思っていますので。

なかなか男の子はしゃべれない子も多いんですけれども、そういうやさしい気持ちを持っている子が大変多いので、うまくコミュニケーションをとって、その中から、自分の将来の本当に一生涯の友だちになるようなものをつくっていただきたいなと思っています。

そういう意味で自立の問題、それから協調性、そして社会性、そして思いやりとかそういうもの、こういったものがリーダーになるための資質として必要なんじゃないかと思つて、まあそれを学ぶことを全人教育という名前では呼ばせていただきました。

(小岩企画振興部長)

他の委員さんから、それでは矢島委員さんから。

(矢島委員)

ありがとうございました。県立大学ができたことで、長野県及び地域が活性していくだろうなというのは本当に想像がつきます。ありがとうございます。

私はその県内のみならず県外から、または海外からもぜひ注目されて、ここのところで海外からの留学生との交流ということで、一方的に行くだけではなくて、一方通行ではなくて、やはり海外からもここに入りたいというような、相互のそのグローバル化ができたらいいかなと、とても期待しております。

それから、長野県には軽井沢に I S A K があります。今、海外からの留学生との交流がまだ途中ということですので、そのような形で交流を深められたら、長野県にあるものをうまく資源活用できたらいいかなというのがあります。

それから、先ほどの全寮制というところでちょっと私が引っかかっているところが、児童養護施設の子供たちが学費免除ということで入学できる条件になっています。その児童養護施設に入っている子供たち、多くではありませんが、発達に特性のある子供たちもおりまして、その子供たちの中でも、やはり二人部屋はどうしても無理という特性がある子供たちもいるんですね。

先ほどの自立という点ではいいかと思えますけれども、人を思う気持ちがあってもなかなかそこがうまく表現できないとか、コミュニケーションできないとかというところで、SDGsでも誰も取り残されない社会ということをやっています。そこでは多様性とか、差別のない社会というところで、それを全部ひっくるめた多様性や、人を思いやる気持ちであるとか、やはり一部の一般化された、それだけではない、何となく枠からはみ出してしまっている子供たちも、多様性というところでお互いに認め、選択肢があるようになればいいなと思います。以上です。

(金田一学長)

はい、ありがとうございます。I S A K の小林りんさんは、この前お呼びして講演もやっていただきましたし、かなり連携をとりながらやっておりますので、ぜひ海外研修とか海外との交流をこれから進めていきたいというふうに考えております。

それから多様性の問題、確かに私の欠けている部分ではありました。ぜひこのあたりも今後の学びにつなげていきたいと考えております。ありがとうございました。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。では塚田委員。

(塚田委員)

ありがとうございました。私はこの大学に非常に期待しています。経済人としてもですね。自分が何者であるか、就職の学生と面接をすると、自分がどういう人間かというので、ちょっと自信がないという子が多いんですね。そういうところで、自己肯定感を持たせる褒める授業というのは大変いいんじゃないかなと思います。

また、卒業生が、隣に信大の副学長の先生がいらっしやいますけれども、ほとんど長野

県に残ってくれないという実態がありまして、信大の学生も半分以上は県外に行ってしまうと。この大学は大丈夫かと。これは会社側にも責任はあるんですが、知事も望むところであると思いますので、ぜひ残っていただきたいなと思います。企業と連携をして、面接等を評価できればなと思います。

(金田一学長)

経営者協会とも仲よくやっております。やはり、大学だけ頑張ってもだめで、企業と一緒に頑張っていくという姿勢は大変重要だと思っております。その辺は知事に、よろしくをお願いします。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。では、教育長から。

(原山教育長)

県内の小中高生の学びの望むことということで、こういうふうに投げさせていただきまして、全くその方向だと思っておりますが、先生から見て、今回、特に県外からも入って、県内も50数%ということですので、県内から入った生徒たち、学生たちが果たしてこの観点から見たときに、どこが一番欠けているとお感じになっているか、教えていただけたらありがたいのですが。

(金田一学長)

主体性が大事だという話を今回しました。これは意外とうちの学生にはあるんです。ただ、これは一期生だからだと私は思います。つまり、うちはまだ実績がない大学です。その実績のない大学だけれども、「僕がここに行って、一期生としてこの大学を日本一の大学にしてやろうじゃないか」と言って来る学生がいるんです。面接をしていて、大きいことを言うなと思ったけれども、そういうことを平気で言う学生が何人かいました。とても頼もしいと思います。

ですので、ちょっとこの一期生だけを見て、うちの大学はこうだというのはなかなか難しいのですが、一期生と、そしてまたうちに来ている、4年前から集めましたけれども、全国から集まった先生方は、最近、大学がつぶれる方向に向かっていきますので、新しい大学をつくるということがないものですから、やる気のある熱心な先生が行き場がなく、逆にうちに来てくださったということがあります。教育県長野ということをおっしゃって来ていただきました。そういう熱心な先生と一期生とがぶつかりあって、何かすごくいい化学反応を起こすのではないかなと期待しております。

ただ、今のご質問に関しては、僕は大学説明会をやっているときに感じたことですが、学生たちはみんなおとなしい、まじめでとてもやさしいし、やる気はあるのかもしれない

けれども、純粋過ぎてというのか、意欲はあるんだと思うんだけど欲が足りないのかな。長野県ってとても幸せな県で、何となくのんびり育っても全然生活に困らないというようなところがあって、その辺がどうも逆にのんびりしてしまうのかなという気がしております。それをすごく感じました。

だから、頑張っってやる気を出して行こうぜとやれば、すごく伸びると思います。うちの大学はこの4年間で、とにかくそういうやる気のある一期生が来てくださったので、ぜひ伸ばして、すばらしい卒業生を出したいと考えております。

(小岩企画振興部長)

荻原委員、よろしいですか。せっかくです。

(荻原委員)

ちょっと話は変わってしまうんですけども、私もかつてスポーツ選手で海外、あちこちへ行ってまいりまして、いつも感じていた違和感というのは、例えば海外に行くとテレビをつけてニュースを見ると、そこに流れてくる情報というのは、例えば地域の紛争であるとか、あるいは貧困であるとか、環境の変化とか、いわゆるその地球規模、世界規模のニュース、情報が流れている。一方で、日本に帰ってくると、ニュースをつけると付度がどうだということばかりで、私たち日本人はもっと世界に目を向けて、私たち自身ができることはもっとたくさんあるんじゃないかという、そういう違和感を常に感じていました。そういう中で、今日は学長さんからお話を聞いて、ぜひともこの長野県立大学で学ぶ方々が、ドメスティックではなくて、やっぱりグローバルに、インターナショナルに活躍、そして目がこう、気持ちがあふくような何かそんな学びをしていただいて、ただ、その方々が世界に出ていってしまうと、また長野県、経済界は困ると思いますけれども、そういう視点を持った生徒さんをぜひ育てていただきたいと期待を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。金田一学長にはこの後の意見交換にも引き続きご参加いただきますのでよろしくお願いいたします。

(阿部知事)

金田一先生、ありがとうございました。私どもが当初構想していた以上に、いい大学にいただいていること、まず感謝を申し上げたいと思います。

委員の皆さんからいろいろ出た意見で、むしろ私が答えなければいけないような話もあったので、ちょっとお話しします。

まずは耳塚先生のこども学科に対する期待は、県全体としても持っていますので、佐藤

部長も出ていますけれども、教育委員会で幼児教育支援センターをつくっていくという形にもなっているので、県立大学が長野県の幼児教育にどういう形でコミットしていただけるのかということは、一緒に考えさせていただきたいと思います。学長が一生懸命、先生方に働きかけていただいているみたいですが、我々のほうも一緒に考えたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

それから、金田一学長のお悩みの、全体支援か個別支援かというのは、私は個別支援でいいと思っています。やる気のある人たちと組んでもらうということが、一番重要だと思っています。

例えば、県がこんな仕組みをつくったから県立大学と一緒にやってね、というので嫌々一緒にやるような学校とやっても成果が上らないと思いますので、むしろ、今、そうやって声をかけてくる学校があるのであれば、そこはおそらく、そういった問題意識の高い先生方がいるところだと思いますので、ぜひ前向きに対応してもらったほうがいいなと思っています。お悩みがあればご相談に応じますので、よろしく願いします。

それから、全人教育で寮の話があって、これ、これちょっと教育委員の皆様方に、私の問題意識を共有したいということで発言しますけれども。

県立大学の一つの特色は、1年生を全員寮に入れてしまうという話で、金田一先生からご説明いただいたとおりです。先日、私、白馬高校に行きまして、寮に入っている人たちとも話をしてきました。それから、先日は売木村に行って、山村留学で来ている子供たちのところへ行って話してきましたけれども。実は長野県はこの寮だったり、あるいは特別支援学校も寄宿舎であったりしますので、寮とか寄宿舎とか、あるいは山村留学で来ている子供とか、実はそういう子供たちが多い県であります。

もう少し、この寮だったり、寄宿舎だったり、山村留学であったり、学校という学びの場とはちょっと違う環境ですけれども、生活を多くの皆さんと共にして生きていくという子供たちに、我々はもう少ししっかり目を向けていく必要があるんじゃないかなと思っていますので、ちょっとまたそこは別途、一緒に考えたいと思います。

それから、発達障がいの子供は一人部屋じゃないとなかなか無理な子供がいるという、矢島委員のご指摘は全くそのとおりだったなと思って、これは設立している我々が考えなければいけない話ですので、場合によったら、その部屋のあり方というものも、原則2人部屋になっていますけれども、もう少し多様な形態があってもいいんじゃないかと思いますが、またそこは一緒に考えたいと思います。

それから、荻原委員がおっしゃった観点については、世界と日本はやっぱりいろいろな環境が違って、日本はちょっと内向き過ぎるなと私も感じていますので、そこは、県立大学だけじゃなくて、全体的に問題意識を共有して取り組まなければいけないと思います。

最後に1点だけ、先生に質問ですけれども、私、あまりこれ先生に聞いたことがないのですが、県立大学の部活というのはどうなっているのですか。地域スポーツ、これから国体等もある中で、県立大学は若者のスポーツの面でどう貢献いただけるのかというのは、



実はあまりそこは設立の時も議論していなくて、そこはどんな感覚かというのを教えていただきたいと思います。

(金田一学長)

ぜひ、冬のスポーツや何かをうちの大学がやればいいなというふうに思っておりますけれども。

私は基本的に、うちの大学、グラウンドもないものですから、どういうふうにスポーツをやっていたらいいかは大きな課題になっております。ぜひ頑張りたいというか、運動はとにかく大事だというのは先ほども自分も申し上げましたとおりで、スポーツをやることは大変重要だと思っております。場所をどうしようかという、その問題がまず、はい。

(阿部知事)

またこちらへ戻ってくる質問をしてしまって、申し訳ないです。ウィンタースポーツだと荻原委員もいらっしゃいますし、県内にいろいろな場も指導者もいらっしゃるので、そういうところに県立大学もうまく加わってもらいと、スポーツ部門でも県立大学の特長を作れる可能性があるのではないかと思いますので、また一緒に考えましょう。

(金田一学長)

わかりました。頑張ります。

(阿部知事)

あと、塚田委員がおっしゃっていた県内就職の話は、私は、結果として県内という思いを持っています。もちろん世界に羽ばたいてもらう学生もいてもいいと思いますけれども。学生のうちに長野県のよさを知ってもらったり、あるいは、今もだいが経営者協会の皆さまにもコミットしてもらっていますけれども、できるだけ企業の皆さまにご協力いただいて地域の企業に目を向けてもらう環境をつくり、自然に県内定着してもらうという形がいいと思いますので、ぜひまた経済界の皆さまにもご協力をよろしく願いいたします。以上です。

## 第2部 高等教育機関と連携した創造的な学びについて

(小岩企画振興部長)

それでは、時間の都合もございますので、第1部はここで区切りとさせていただきます、第2部に移りたいと思います。それでは第2部、原山教育長から、資料2についてのご説明をお願いします。

(原山教育長)

高等教育機関と連携した創造的な「学び」の取組事例を出させていただいておりますけれども、いろいろな取組がきっとあると思いますし、そして、さらに言えば、やる気のあ  
る者同士が個別的に取り組んでいくほうがよほどいいよという話もあると思います。ただ、  
我々とすれば、県内の子供たちが高等教育機関の皆さんと本当に連携しながら、みんなダイ  
ナミックに取組を展開できる、そういう姿をぜひ実現したいなと思っています。

では、その魅力的な取組、どんな取組を実現したらいいのかという、一つの例示として  
幾つか挙げてみたいと思っております。

一つは県内の連携事例ということで、資料2のスライド2にありますとおり、まず信州  
大学の取組ですが、これまた武田理事・副学長さんのほうからいろいろなご説明があると思  
いますので、一例としてこれがあるということをご理解いただきたいと思えます。

それから次に、スライド3の大学と連携した地域人教育ということで、これは飯田O I  
D E長姫高校と松本大学が組んだ、非常に地域に入り込んだすばらしい教育が展開されて  
いると思っております。それから、その下に諏訪東京理科大学の高大連携センター設置に  
よる人材育成という取組。

それからスライド5にありますけれども、長野大学の大学と高校の社会福祉の連携授業。  
そしてスライド6の学生ボランティアによる部活動支援という松本大学の取組がございま  
す。

スライド7でありますけれども、これは慶応大学の取組であります。高校生を実際に研  
究助手として放課後に勤務し、しかも時給制というような取組がございませ

それからその下のスライド8にありますけれども、これはどちらかというと、いかにも  
県が考えそうな部分ではあるのですが、近隣の高校生には、その大学に行ってもら  
うけれども、遠方の高校生は行けませんよねということで、大学教員が高等学校に  
出向き講義するというのですが、県内の全ての公立高校生が受講できるように、場と機  
会を工夫しているという取組がございませ

それからスライド9でございませけれども、これは耳塚委員のお茶の水女子大学で実施  
されております。附属高校生が取得したものについては、入学後、大学の単位として認定  
するという、そういうつながりを持った教育をやっているということでございませ。それ  
からその下のスライド10は、京都大学で非常に手厚い指導を高校生に対して大学として行  
っているというものがございませ。

スライド11でありますけれども、これまさにキャリアデザインという考え方だと思いま  
す。大学というのは一体どんなものかということ、高校生に問いを立てさせて仮説を立て、  
そして実際どうだということ、大学の授業の中で検証するという取組であります。

それから千葉商科大学で教職のインターンシップということで、実際に大学生たちが学  
校の授業の中に入りながらやっという取組がございませ。

それからスライド13ですけれども、これは国際教養大学が留学生と就学前児童等と国際

交流をするという、こういう取組もごございます。スライド14の関西学院大学では、大学の実験施設を使用しながら体験セミナーを行うというものがごございます。

スライド15でありますけれども、これは小・中・高・大の異校種間連携によるチャレンジショップということで、小学生が野菜を栽培して高校生が商品化とか、中学生が販売をやったりとか、大学の大学院生が教員と共に販売を支援すると、こういう形で異年齢、異校種間の連携によるチャレンジショップをやっているということです。

最後のスライド16、これが特別支援学校に対する支援でありますけれども、芸術系大学の教員、学生が特別支援学校の生徒、特にアート系をどうやって支援するかという取組でありまして、これも非常に参考になるかなと思っています。

一例として申し上げましたけれども、こういったものをどうやってダイナミックに全県で展開できるのかなというのは、私どもとすれば、やはり思いとしては持っているというところでございます。以上でございます。

(小岩企画振興部長)

本日は、信州大学の武田三男理事・副学長にもお越しいただいておりますので、今の原山教育長のご説明の中でも紹介されておりましたけれども、信州大学での地域連携の取組についてご説明いただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

(信州大学 武田理事・副学長)

ご紹介ありがとうございました。それから、金田一先生、どうもありがとうございました。最初、金田一先生のお話を聞いていて、だんだん信州大学も影が薄くなってきて、いや、大変かなというふうに思いました。ぜひ参考にさせていただきたいと思っております。

すみません、私の資料はA4、1枚物です。最初の議題のところには、この会議の主題を書かせていただいております。それに対して、第2パラグラフのところからなんですけれども、信州大学における取組というので、1番目はこれまでいろいろな中学校や高校との協定を結んでやっているものがありますということで、一応、これはこういう学校と、その括弧の中にある、例えば上伊那とは農学部でいろいろなことをやっていますということを紹介させていただいております。

それから2番目は、これはもちろん、この長野県さんとの協定というのもございますし、それから、特にうちのキャンパス、幾つかの市町村の中にありますので、その該当する市町村との協定も直接結んでおります。それからもちろん、この県の教育委員会、それから市、それから農学部のある南箕輪村の教育委員会とも協定を結んで、その中でいろいろな取組をさせていただいております。

3番目に、実際にどういう取組をやっているのかを、私と、それからホームページ等でも載っておると思いますが、関係しているものを中心にここに挙げさせていただきました。

先ほどちょっと出てきたかと思えますけれども、スーパーサイエンスハイスクールの授業には、これは最初は諏訪清陵でしたが、その後、屋代、それからほかのSSHの授業には、これは直接教員が、先ほどありましたように出向いて、そのSSHのそのコースの子に対して授業をやると。それから、逆に大学のほうに来てもらって実験等をやるというような、すみません、今後の協力事項のところにもちょっと書いてありますけれども、そのようなことをやっております。

これは特にサイエンス関係が多いんですけれども、最近はSGH（スーパーグローバルハイスクール）ですか、上田高校等もありますので、それは繊維学部さんが近くにあるので、繊維学部のほうと上田高校さんと協力してやっております。

それから、これは県の教育委員会さんのほうの主催なんです、信州サイエンスミーティングというのを、もう7年ぐらいになると思いますが、声をかけていただきましたので、私が理学部長をやっているときに、理学部の校舎をご利用いただけるということで、こちらから大学へ高校生が直接来ていただけると、その後、受験していただけるんじゃないかというのあって、ずっとこれ長く、1年に2回来ていただいて、最後のときは実は本学とか理学部の学生の研究発表と、それからSSH、この場合、理数科を持っている高校の生徒さんも参加していただいておまして、彼らと高校の生徒の発表、1研究、課題研究の発表と、それから信州大学の発表の学生も同じ会場で、何となくこれ負けているんじゃないかと思いがらいつも見えていますけれども、そういうのがサイエンスミーティングです。

それからもうひとつ、サイエンステクノロジーコンテストというのが、これは全国大会のがあります、それも県のほうから、会場はうちと、諏訪の東京理科大学さんが会場になると思いますが、そちらでやらせていただいております。

それから、科学オリンピックというのは、これは全国というよりも世界の物理のオリンピックとか、そういうものの予選をこちらで、いろいろと会場とか、それから試験監督とか、そういう立場で協力させていただいております。

それから、もう少し小・中まで広げたところでは、その次の青少年向けの科学イベントというのを、これは各学部でそれぞれ、ここですと教育学部、工学部で毎年1回は開催させていただいております。

その括弧の、下の括弧の中に少し書きましたけれども、最初の青少年のための科学の祭典というのは、これは国のJST（科学技術振興機構）のもので、各都道府県で毎年、開催されているものなんです、これも各、今年は6月の終わりごろに農学部のキャンパスで開催することになっておりますが、毎年、各キャンパスを回りながらそれぞれのところで必ず、年に、ちょうど夏休み前後なんですけれども、そこでやらせていただいております。

それから信州自然史科学館、これは理学部主催で、これは青少年の科学の祭典とは別に毎年必ずやらせていただいております。その他、各学部ごとに、こういう取組をやってお

ります。

それからその次は、先ほども書いていただいた、ご紹介いただいた、教育長からご紹介いただいたところなんです、出前講座、それから放送公開講座、それから、出前講座は もちろんこちらから出向いて高校とか、ある場合は公民館とかでやらせていただいている んですけれども、次の市民開放講座は、これは語学の普通の授業のところに来ていただく という形でやらせていただいております。

それから後で、おそらく資料3のところでご紹介いただけるかと思うんですが、「信州 アカデミア」という、文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+（プラス）」を採択させていただいて、そこではいろいろな立場の方に対して、講義 ではないんですけれども、様々な授業形態でいろいろな取組をさせていただいております。 というのが、今までの取組の紹介です。

今後の協力事項ですけれども、2つに分けて、題名が高等教育で、特に高校の話が多か ったので、高校の生徒さんに対してこちらでどういうことができるのかというのを最初の 1のところに書かせていただきました。

主に本学の教員が協力させていただけるのは、先ほどの出前授業とか講演会というのを、 例えば高校でしたら高校ではこういうことができると、高校を会場にしてという意味です けれども、逆に大学のほうで受け入れるという形ですと、別個に演習とか実験、実習授業 というものとか、研究室のほうも、これは少し、例えば上田ですと繊維学部のほうでやら せていただいておりますけれども、そういうことが大学を会場としたら可能性がある。 特にSSHの授業ではこちらから実際に行っているのもありますし、場合によっては大学 のほうに生徒さんに来ていただいて、授業をするというような取組でございます。

それから学生の協力と、これは信州大学の学生、院生にとっても何かいいことがあった ほうがいいので、学生に対して、生徒さんに対して学生がどういう協力ができるかなとい うことを少し考えました。先ほどのCOC+の授業の中には、一緒に学生さんが出向いて やるというのもあるので、こういう協力の仕方でもできるかなと。それから、その前のコア サイエンスティーチャー授業は、これは教育委員会のほうに非常にご協力いただいて、学 生が、ちょっと教育実習とはまた別にやらせていただいております。

あと、教員に対してですが、今度、高校の教諭といいますか、高校の先生方、現職の教 員の先生方に対しては、例えば、今現在の本学で開催しておりますFD講習会というのも ありますので、テーマが合えば、そちらに参加していただけるということもできるかとい うことで挙げさせていただきました。

基本的には、特に本学の教育学部、それからほかの例えば理学部、人文学部の、教員に なりたい子は本当に県、それから特に教育委員会のほうに非常にお世話になっております ので、そういうことを通してと、それからこちらでできることは協力させていただきたい と考えております。よろしく申し上げます。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。資料をもう一つご用意しております。資料3につきまして、佐藤こども・若者担当部長から説明をお願いします。

(佐藤こども・若者担当部長)

よろしくお願いします。資料3でございます。

先ほど、あいさつ等の中にもありましたけれども、本年度、本格的にスタートいたしました「しあわせ信州創造プラン2.0」、そこに掲げてございます「学びの県づくり」の実現のためには、やはり高等教育機関におかれましては地域の知の拠点となっていただきたい。県教育委員会と協力しながら、共に「学びの県づくり」に取り組んでいただきたいと考えているところでございます。

その上で、県内高等教育機関に期待する姿を次のページにお示したところでございますので、お願いいたします。

2ページのところに4つ大きな柱として記載させていただいたところでございますけれども、期待する県内高等教育機関の姿といたしまして、1つ目には、まず大学志願者の減少などにもつながる少子化の進行やAI、IoTなどのテクノロジーの発展、人生100年時代の到来といった社会・経済の劇的な変化に対応して、さらに推進していけるような、そんな教育や研究の拠点となっていただきたいという点でございます。

それから2つ目には企業・市町村・高校等と連携し、先ほど高校等との連携のお話が出ていましたけれども、地域課題の解決に積極的に貢献する拠点となっていただきたいという点でございます。

3つ目といたしましては、AI、IoT、ICT、医療・ヘルスケアといったこれからの成長産業分野、そういったものにおける人材育成や地域における企業の支援ができるような拠点としての姿を期待しているものでございまして、4つ目といたしましては、企業の事業性、業種転換や生産性の向上のために従業員が在籍しながら大学に通い、知識、能力を学び直しできるような、リカレント教育の拠点としての姿で、先ほどもお話があったかと思いますが、大学院の社会人コース、一般向け公開講座の充実など、そういったことを期待するところでございます。

そういった期待する姿がある中、ただいま、信州大学の武田理事や原山教育長のほうからもお話がありました連携事例などもございますけれども、県内で、この創造的な学びを創出し、さらに広げていくためには、これまで行ってきた幼保・小・中・高等学校と県内高等教育機関との連携を一層加速、充実してまいりたいと考えているところでございます。

そして、学びの県づくりの実現ということでございますけれども、学校間の連携のみならず、地域や企業など、さまざまな場面で、県内高等教育機関との効果的な連携を実現していきたいと考えているところでございます。そのためにも、県内各大学の特性やご意向、それから地域等のニーズを大切にしながら実効性のある動く仕組みといったものを、さまざま

まな機関と共に考えていけたらと思うところがございます。

そういったことを通じて、高等教育機関との連携を、そういった視点で行いながら、学びの県づくりの実現のために、共に進めていければと思うところがございます。ありがとうございました。

(小岩企画振興部長)

それでは、今、一連のご説明、また事例紹介等々を踏まえまして、残りの時間で意見交換をさせていただきたいと思えます。

高等教育機関との連携ということで、アイデアも含めましてご意見を頂戴できればと思いますが、いかがでございましょうか、よろしくお願いいたします。

(耳塚委員)

社会貢献というのは、大学の重要な使命の一つではあると思えますけれども、やはりどうしても教育と研究という二つの機能に比べれば、相対的な重要性というのは小さくならざるを得ません。

この社会貢献の活動が、これは教育委員会の人間としてしゃべっているというよりも大学側としてしゃべっていることに近いんですけれども、社会貢献的な活動が、大学としてそれを行った場合に長続きをするためには、大学にとってもやはり何がしかの利益があるとか、あるいは大学の教員が積極的に動機つけられるような類のことである必要があると思えます。

それだけではないんですけれども、端的な例としては、先ほど教育長から紹介いただきました9ページにあります高大連携教育というのを、入試に結びつけたようなプロジェクトといいますか、そういう企てであります。お茶の水女子大学以外にも東工大でもこれを実施しております。どうしてもこういう取組を、教育プログラムを提供して、高校生に提供して、それを実際には選抜の機会にして、そこから学生を入試でとってしまうということです。

東工大の例を見てもこれは実質的に、入試の対象としているのは3つの高校だけに限定をされておりまして、あくまでも試行的といいますか、研究のための入試の方法という、そういう位置づけではありますけれども、どうしてもこういうことをやろうとすると、全部の高校に普遍的に適用したような取組としては成立せず、限定的にならざるを得ないということがございます。

入試のように直接、大学にとって何かの利益が期待できるというところまではいかないにしても、例えば高校生の探求活動へのアドバイスとか指導というものについても、大学の先生は比較的、抵抗なくというか、むしろ喜んで参加することが多いのではないかと思います。

私も昨日、附属高校のSGHの課題研究の授業に、最初は見えていたんですけれども、そ

のうち黙っていられなくなって生徒についてアドバイスをしてしまう、例えば問題の設定の仕方だとか、方法の選択だとか、大学の教員から見たら、やったらいいと思うこと、結構わかりますので、そういうアドバイスはしてしまいます。これは、何といたしますか、見返りは何にもないんですけども、長期的に見れば、多分、これが教育の質の向上に役立つということだろうということで、十分に納得できることとなります。

このような、本県でも高校生の探求学習へのシフトというのは非常に大きな課題であって、むしろ、この探求的な学習へのシフトというのは、大学の先生方の協力がなければ、うまくいかないんじゃないかと思えるぐらいであります。

先ほど信州大学からご報告がありましたけれども、これも相当に力を入れてやっていただいていうことがよくわかりました。引き続き、こういう取組をお進めいただければと思いました。

1点、つけ加えると、高校教員向けの探求の講座というのもぜひ開設したほうがいいと思っています。高校の教員が探求の方法について、必ずしも指導ができるほど知っているわけではないというのは非常に大きな問題で、できれば、それもつけ加えてご協力をいただければと感じました。

(阿部知事)

私のほうから問題提起したほうがよいと思うので、先にお話しします。

資料3について、最後に「構築していきたい」としか書いていないのだけれど、これは、具体的にどうしていくんでしょうか。これだけ見せられても、はて、はてな、クエスチョンマークが3つぐらい並んでしまうのですが。

(佐藤こども・若者担当部長)

はい。ここには構築していきたいということでございますけれども、今、それぞれの大学に担当が回っていろいろとお話をお伺いしたりして、大学の側のいろいろな思いですとか、意向ですとか、ニーズ、それからそれぞれの大学で取り組んでいることですとか、そういったことをまとめているところでございます。

教育委員会では、高校や小中学校等のニーズを、多分、お持ちでいらっしゃると思います。あと地域や産業界でどういったニーズがあるのかといったところ、そういったものをうまく組み合わせられるような仕組みを、考えていきたいということでございます。

(阿部知事)

誰が考えるの、これ。

(佐藤こども・若者担当部長)

県と、はい。



(阿部知事)

大学もコンソーシアムみたいなものがあるわけですね。せっかくこういう場をつくったのだから、教育委員会と県とが連携して、高等教育機関とその高校、小・中学校、幼稚園であったり、社会人であったりの学びをどうするかというのは、やっぱりちゃんと考えて、それをもう一回ここに報告してもらわないといけない。ただ単に言いつばなし、何か聞いてよかったですね、という話ではいけないと思うので、もう少し具体的な形を考えて、ここの場にもう一回、今年度中に出すということをやってもらわないと意味がない。それでいいですね。はっきり言ってくれないと困るので。

(佐藤こども・若者担当部長)

はい、努力させていただきます。

(阿部知事)

いや、努力じゃなくて、私が努力するので、それは、そうしないと。これ、学びの県づくりの極めてコアの部分なので、コアの部分をつまみに進めるというのは、それは極めてよろしくない。そこをお願いします。

そういう観点で、少し何か皆さんから具体的な提案を出してもらったほうがいい。私から三つお願いしておきます。一緒に考えますけれども。

一点目は、大学でも、高校生とか中学生を受け入れるサマースクールみたいなものを作ってもらえないのかなど。県立大学の寮、夏休みはどうするのですか。

(金田一学長)

寮でサマースクール、小学校のためのサマースクールですか。

(阿部知事)

いやいや、高校生とか。

(金田一学長)

はい、ウェルカムです。

(阿部知事)

別に今、ここで決めてくれとは思いませんが、やっぱり・・・

(金田一学長)

うちはつまり、先生がやるよりも学生がやりたがるのですが。それでよければ。

(阿部知事)

そうかもしれませんね。せつかくの寮ですから、夏季休暇とかそういうときにどう使うかというのがありますね。それだけではなく、高大接続の意味でも高校生が大学の授業に触れる機会が必要かなと思うので。あとちょっと、私の願望をいくつか申し上げておきます。

先ほどの御茶ノ水女子大学の、これ耳塚先生の、まさに私、これいいなと思います。大学の入門科目を高校で受講できると。例えば県内大学と県の教育委員会で組んで、長野県の高校で一步進んだ授業をやったら、県内大学に進学したときには単位にしますということをやれると、単純な高大連携ではなくて、実質的に意味がある連携になると思うので、そういうのは考えられないのかというのが二点目。

三点目が、原山教育長がレポートしてくれたものの中で、県内大学ではないのですが、一番最後の芸術系大学と連携した特別支援学校支援、これはちょっとしっかりやらなければいけないと思いますので、パートナーを組んでくれそうな大学を探したほうがいいと思います。私からまず三つ、一緒に検討したいテーマを申し上げました。

(原山教育長)

教育委員会側からすると、ぜひやりたいんですね、本当に。我々にとってみれば本当に、その学校だけで、今までのように学校だけで、小学校、中学校、高校、学校だけで閉じた学びでは絶対、もう追いつかない時代になっていて、そういう意味では、先端に行く知の拠点である大学側のリソースをぜひ、活用したいという言い方はあれですけども、したいんですね。

そういう意味でいえば、私どもは教育委員会としての一枚岩でいろいろなニーズはあり、それをぶつけるということは十分可能だと思っていますので、今度、逆に大学側が、先ほど耳塚委員おっしゃったように、本当にそれが持続可能性のある、大学にとっても持続可能性ある取組なのかどうかというところがやっぱりポイントになるので、そのあたりのところをぜひ、県民文化部のほうで中心となって構築してもらおうと、イコールパートナーとなりながら進めていけるなと思っていますので、ぜひお願いしたいと思います。

(武田理事・副学長)

すみません、今のお答えですが、よろしいですか。先ほど耳塚先生のほうから、大学のほうで高等学校の教員に対してどういう教育がというのをおっしゃられたと思うんですけども、現行では、本学の場合は、教職大学院で現職の教員の方に入っただけのを進めています。それが一つと、もう一つは免許更新がありますので、それは主に夏休みとかなんですけども、そこで実際にセンター的な研究、いろいろな分野の先生方に講師になってもらってやっているのと、現在はその2つぐらいだと思います。はい。

(佐藤こども・若者担当部長)

具体的に各大学のご意向もあるかと思えますし、大学側は大変お忙しく、教育委員会からは先ほどたくさんご要望があるというお話もありましたので、そういった双方の状況もきちんと踏まえて、また教育委員会と相談させていただいてやっていきたいと思っております。ありがとうございます。

(金田一学長)

すみません、私、今日は学びというキーワードでやったものですから、あまり連携についてはあまり話ができず申し訳ありませんでした。ぜひ高校の先生方を何か、この前は教育委員会のほうからPBL（問題解決学習法）の話をしていただきましたけれども、そういうときにやっぱり大学の先生、うちのそういう専門家もいますので、高校の先生方を呼んで一緒にその学習をするというようなことはぜひやらせていただきたいと思っております。

それから高校との連携ということでは、これも、どういうわけか、うちは教員よりも先に学生が出てきてしまうのですけれども、シェアハウスを高校と大学と一緒にやるという話が確かありましたよね。そういうようなこともぜひうちはやりたいと。多分、うち1年生しか全寮制ではないので、2年になったときにも一緒にいたいと。では、それはもうアパートでなくて、シェアハウスじゃないかというような話が出ておりました。そのときに高校生と一緒に、つまり同じ学年だけではなくて、縦につながるようなシェアハウスがあってもいいのではないかという、まさにこれは原山教育長が前にそういう提案をされたのかもしれないけれども、そういうようなところから始めて。それから大学の先生は確かに教育研究のほうで実績は上げられるのですけれども、なかなか地域研究とか社会貢献というのは業績にならないんです。というか、それをいかに業績にするかということをごちらが、大学側が考えていかなければいけない。そうしないと、教員は動いてくれないということがございます。その辺もちょっとこれから検討していきたいと考えております。以上でございます。

(小岩企画振興部長)

まだ時間もとれますので。

(矢島委員)

1点だけ、先ほどの大学と高校との連携というところで、私はそこに中学生を是非入れてもらいたいと思えます。それは地域課題の解決に貢献する拠点としてというところで、資料3のところにあります。

どうして中学を入れるかという、まず中学生が地元、そこで生まれ育っている場所で

すよね。そこに愛着を持って、その子供たちが参画するということをしてほしいなと思います。そこに地元の地域課題を、そこで住んでいる子供たちがきつと抱えているだろうと思いますし、自分たちの地域をどのようにつくり上げていくかというのも、高校生はいろいろなところから来ていますが、中学生というのはその地元です。そこで中学生が入るためにはやはり市町村や、地元経済界、それから学校等が連携してそういう場を提供していただきたい。子供たちが主体的に参画できるような、それは大人から教えてもらうのではなくて、みんなが参画してアイデアを出し合ってその中からつくり上げていくという視点で、中学生というところも必要だと思います。多分、伊那市さんがそのような形をとっているかと思います。参考にさせていただければと思います。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。中澤委員、お願いします。

(中澤委員)

ありがとうございます。この創造的な学びは本当に具体的に、何かあり方をしっかり検討していく課題だなと思っています。

学生たちが私の幼稚園に来て授業をしたりしている中で、やっぱり本当に、園舎がない森の中での活動の中で、学生の方たちがやっぱり実際にハザードとリスクを学んだり、命のことや本当にコミュニケーションのことや、子供にとってどんな環境が質が高いんだろうかとかということを現実的にしっかり、いろいろ気づいていくことがすごく多いなと感じています。

何か、長野県ならではの自然保育というものと大学、高校、大学の人たちが何かつながって、その中で一緒に学んだり過ごす機会が、一つはこの連携という中であってもいいのかなと思っています。

(小岩企画振興部長)

予定の時間は来ておりますが、すみません、あともう少しだけ延長させていただきまして、教育長、知事も含めて、あとお二方にご発言をいただければと思います。それでは武田理事、お願いします。

(武田理事・副学長)

すみません、先ほどの資料3、スライド番号3のところなんですけれども、期待する県内高等教育機関の姿の①のところの2つ目の丸で、企業・市町村・高校等と連携し云々のところなんです、大学の例としては、本学の場合、最近、社会基盤センターなるものをつくりまして、軽井沢町とは、新しい協定と実際の事業を立ち上げております。そういうものが一つ。

それから、先ほど申し上げましたけれども、COC+の事業で、信州アカデミアでかなりいろいろなところと一緒にやっておりますので、また参考にさせていただければと思います。

それから、その次の②のところの成長産業分野とか、それから従業員が在籍しながら云々のところなんですけれども。実際にこれは、DC（大学院博士課程）の授業で、工学部のキャンパスの中に新しい建物があるんですけれども、水環境のことで、そこでは共同研究で実際に企業さんのほうから何人か来て、一緒に共同研究させていただいております。

それからその次の、これ従業員が在籍しながらですので、我々にとっては社会人入学のことだと思うのですが、こちらは現在、1,900人ぐらい大学院生がいるのですが、マスター・ドクター含めて、先ほど見たら460名ぐらいが社会人入学です。企業の方が多いんですけれども、中には高校の先生も入ってこられて、全体の4分の1の方が社会人だということで、もしこれがないと、うちの大学院もつらい状態になるぐらいのパーセンテージですので、その辺もぜひ今後とも協力させていただきたいと思います。

（小岩企画振興部長）

知事、ございますか。

（阿部知事）

では、ちょっと違う角度から。今日は、教育委員会の皆さまとの総合教育会議なので、大人の学びについてはあまり触れなかったのですが、冒頭申し上げたように、私どもの問題意識としては、子供たちだけではなくて大人の学びについても、県内大学にはぜひ協力いただければありがたいと思っています。あれもやってくれというお願いばかりで申し訳ないのですが。

例えば、県では近々「環境カレッジ」というのを立ち上げて、大学も含め、いろいろな公開講座みたいなものを県民の皆さまにわかりやすくお伝えし、リアルな学びと、将来的にはネットでも学べるような環境をつくっていきたくと考え、徐々にそういう取組を行っていきます。県内大学の皆さまにも我々の考えをお伝えしながら、ご協力いただける部分はどんなところかを一緒に考えていきたくと思っていますので、武田理事・副学長、金田一学長をはじめ、県内大学の皆さまにおかれましては、よろしくお願ひしたいと思ひます。

（小岩企画振興部長）

第2部につきましても、まだまだ議論が尽きないところでございますが、高等教育機関と県内高等学校等が連携した創造的な学びの創出ということで、本日ご議論いただきました。今後も、本日のご議論も踏まえまして、具体的な方策や課題等を整理して、またこの場にもレポートをいたしまして、引き続き実効性のある連携の形を共に考えるプロセスを

とっていきたいということで、本日の議論の確認ということにさせていただきたいと思  
いますので、よろしく願いをいたします。

## 5 閉 会

(小岩企画振興部長)

以上で本日の議題は終了とさせていただきます。

最後に、次回会議の日程でございますけれども、9月頃の開催をしておりますが、具  
体的な日程につきましては、改めて事務局からご連絡を申し上げます。

また、本日お越しいただきました金田一学長様、武田理事・副学長様におかれましては、  
誠にありがとうございました。

それでは、本日の会議はこれで終了といたします。ありがとうございました。